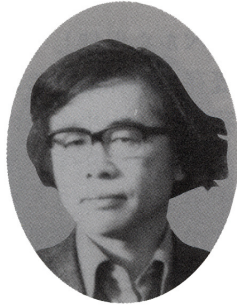


## 佐藤幹夫名誉教授がウルフ賞（数学部門）受賞

佐藤幹夫本学名誉教授（数理解析研究所元所長；文化功労者，米国科学アカデミー外国人会員）が2002/3年 Wolf 賞（数学部門）を5月11日に受賞された。日本人数学者の同賞受賞は1987年の伊藤 清



本学名誉教授（数理解析研究所元所長）以来16年ぶりのことで真に喜ばしい。その受賞理由は「超関数と超局所関数の理論，ホロノミック量子場理論，ソリトン方程式の統一理論を含む代数解析学の創造（creation）」であり，これ等の主題の内，超関数論以外のものは佐藤名誉教授（以下佐藤教授と略記）が数理解析研究所に御着任（昭和45年）以降に同研究所を舞台として展開された理論であるだけに所員一同の喜びは一入である。

受賞理由の一つ，超関数論は関数概念の拡張を層係数の相対コホモロジー群を用いて行う，と云う独創的なもので佐藤教授ならではの仕事である。又超局所関数論は超関数の特異性が余接束上で詳しく解析され得ることを示して超局所解析学の出発点となった理論であり，そこで得られた一般の線型微分方程式系の超局所構造定理は佐藤教授の“vision of algebraic analysis”をよく示すものであろう。これ

等の理論形成に於て佐藤教授の物理学への造詣の深さを窺うことが出来るが，より直接的な数理物理学への寄与としては，T. T. Wu のグループの2次元 Ising 模型の解析に刺戟を受けて構築されたホロノミック量子場理論，及びその理論の一つの発展である「ソリトン方程式の解と無限次元グラスマン多様体との対応の理論」が挙げられる。これ等の研究に於て Ising 模型の背後の isomonodromic 変形の存在を見抜いた洞察力，或いは，広田双線型微分方程式がプリュッカー関係式として理解されると云う意外な事実の発見等はとりわけ佐藤教授らしい独創性の発揮された所と言えよう。

佐藤教授は次々と新しい分野を開拓されてきた稀有の数学者であり，御自身が京都新聞のインタビューで述べてみえるように「若い人が押しかけ女房のようにして来てくれ」ての共同研究も多く，上述のお仕事の多くもそのような佐藤教授を中心とした共同研究の成果である。この間の事情を「押しかけ女房」の側から見たものとして次の故新谷卓郎氏の言葉を引用して本稿を終わりたい。「佐藤先生の使い方？何か一つ結果を持って行ってごらん。10倍にして返してもらえるから。」

（数理解析研究所）